1　白夜に憂う

焦点の定まらない潤んだ瞳、今にも吐息がこぼれてきそうな半開きの唇、そして小柄ながらもめりはりのあるボディ。

「どうぞ、触ってあげてください。とてもデリケートなので、優しくね」

営業用の笑みを浮かべて傍らに控えている女性スタッフに促された僕は、差し出されたウェットティッシュで手を拭いてから、そっと二の腕に触れてみる。思ったより硬かったが、ひんやりした肌には微かな湿り気と吸いつくような粘りがあって妙に生っぽい。次はやや大胆に、白いブラジャーの中に手を挿し入れ、Eカップはあろうかという乳房を揉んでみる。こちらは、ずっと柔らかい。それでいて適度な弾力もある。さらに乳首を探り当てて、こりこりした感触を確かめていると、背後から大下が訊いてきた。

「どうよ？」

「すっげーリアル」

我々は新橋に近い銀座の小さな古ビルの地下にある魔窟のようなギャラリーにいた。展示されているのは、ラブドールと呼ばれる若い女性を模した等身大の人形、平たくいえば高級ダッチワイフおよびその関連資料だ。有楽町で映画を観たあと、付近をぶらぶらしていてたまたまポスターを見つけ、どんなマニアが来ているのかと覗いてみたら、驚いたことにごく普通のカップルや女性同士のグループなどで押すな押すなの大盛況。中でも一番人気は、素材にシリコーンゴムを用いた最新のドールに触れられるコーナーだった。

本当はもっといろいろな部分を触ってみたかったのだが、衆人環視の中でこれ以上の破廉恥行為に及ぶのは憚られる。僕は後ろ髪を引かれる思いで大下と交代し、ほかの展示に移動した。

ドールの頭部だけがずらりと並べられた棚や、反対に頭部のないボディが両腕を上げかけた姿勢で鎮座している様子、その金型など、工房内部と制作工程を紹介するシュールな写真パネルを眺めていると、すぐに大下が追いついてきた。

「もう行こうぜ」

人混みをかき分けて狭い階段を上がり、どうにか地上に戻った我々は、中央通りへ出て老舗のビアホールに入った。あたかも造物主の悪意が込められているかのような強い日射しが容赦なく照りつけてくる八月の真夏日、しかも土曜日の夕方のこととて、ここも人でいっぱいだったが、アールデコ風の装飾が施された昭和モダンな店内は天井が高くて開放感がある。大きな柱の陰のテーブル席に落ち着くや、ヘビースモーカーの大下はすぐさま煙草に火をつけた。

「あのサブカル女子みたいなの、むかつかねぇか？　あいつらがわんさかいるせいで、本気のやつらが委縮しちゃうじゃんかよ」

確かに、芸術家を気取っているらしいベレー帽や頸にかけたごっついヘッドホンなどでそれらしい雰囲気を漂わせている若い女性が多かったかもしれない。一方、見るからに生身の女性と縁遠そうな男の一人客はむしろ少数派で、我の強そうな〝女子〟たちに囲まれて肩身が狭そうだった。

「たぶん、あの子たちなりのアピールなんだと思うよ。ああいう展覧会を不潔とか言って嫌悪感を示すようなカマトトとは違うんだぞっていう」

「それ、言えてるよ。まったく、たちが悪いよな。ブスばっかだったし」

運ばれてきた大ジョッキの生ビールをぐいとあおって一息に半分ほど空けると、大下の毒舌はますます滑らかに回り始める。

「お触りコーナーにいた女もナンだよな。すかした顔で『どうぞご自由に』なんつってたけど、腹ん中じゃ『このキモオタどもが！』って思ってんだぜ、絶対。あの女の目の前でお触りさせられるのって、ほとんど羞恥プレイみたいじゃねぇか？　俺、ちょっと興奮したもん」

「向こうにとっても羞恥だろうよ。おまえみたいな変態が好き勝手におイタしてるのを目の前で延々と見せつけられるってのは。だんだん自分がやられてるような気がしてくるんじゃないか？　たしか脳科学か何かの実験で、似たようなのがあったと思う」

「案外、それで自分も興奮してたりしてな。頭ではキモいと思っても、あそこはびちょびちょで……」

「ＡＶの見すぎだな」

「豊かな想像力のたまものだよ」

「妄想力だろ。もっとも、僕もあの人とダブらせながら人形のおっぱいを揉んだりしてたかもな。おっ、華奢に見えて意外と……なんてね」

「昴（すばる）、おまえの方がよっぽど変態だよ」

独断と偏見に満ちた、聞くに堪えないセクハラ発言の応酬。酒の入った男同士が話すことなんて、しょせんこんなものだ。

「それにしても」と僕は言った。「あのクオリティは尋常じゃないな。ビニールに空気を入れて膨らませる素朴なタイプと比べると、隔世の感があるっつうか」

看板料理のローストビーフを頬張りながら、大下がうんうんと肯く。

「馬鹿みたいに口をぽかんと開けた一昔前のやつだろ？　あんなんじゃ起つものも起たんけど、さっき見たようなやつだったら全然イケるよ。俺、マジで買っちゃうかも。問題は置き場所だな」

「置き場所より、美月（みつき）さんには何て言うんだ？」

僕は独り者だが、大下は結婚している。たしか、じきに丸七年で、子供はいない。すぐにでも欲しいという大下に対し、フリーランスのテキスタイルデザイナーとしてそこそこキャリアを積んできた奥さんの美月さんは高齢出産のボーダーラインを目前にしていまだ躊躇しているらしく、そのことでよく口論になるんだとか。

「大きめのフィギュアだって言い張るよ」

「いや、大きすぎるって」

あのギャラリーを訪れたことも、ここで話したことも、すべてはシャレだった。マジで買っちゃうかもと言った大下は、決してマジではない。彼にとって、実際にドールを所有してブログに恋人同士のようなツーショット写真をアップしたりする〝本気のやつら〟は別世界の人間なのだ。

なるべく空疎な会話を心がけるというのが、かれこれ二十年近いつき合いになる我々の酒席におけるテーブルマナーだった。一種のゲームみたいなもので、深刻な話をするのはルール違反というか、粋じゃないと思っている節がある。

そのような暗黙の了解を前提とする言葉のパス回しが乱れ始め、野暮な本音が頭をもたげてきたのは、入店して三時間余り経った頃だった。ビールをウイスキーに替え、なおも速いピッチで杯を重ねていた我々は、すでに酩酊していた。

「僕はいいと思うけどね。セックスの相手に恵まれない人たちが、ああいう代用品で性欲を解消するのは理に適ってるよ。それで満足してる分には、別に害はないんだし。生身の女の人に悪さして逮捕されるより、ずっといい」

「だから、ああいうのを買うような連中は、それだけじゃ満足できなくなるんだって。いずれ絶対に本物の女が欲しくなるんだよ。でも、元来がコミュニケーション下手で普通に女を口説いたりできないんだから、中には違法な手段に訴えるやつだって出てくる。俺に言わせりゃ、どいつもこいつも犯罪者予備軍だね」

「いやいや、そんなことないって。だって、みんなオナニーくらいするだろ？　その時にエッチな写真やビデオを見たりするのと、どこが違うんだ？」

「あそこまでリアルな人形を使うのは、オナニーじゃなくて疑似セックスだ」

「オナニーと疑似セックスって、イコールじゃないのか？」

「全然違うって！　写真やビデオはただのズリネタだけど、人形と寝るような淋しいやつらは目先の性欲を解消するだけじゃなくて、人肌の温もりを求めてるんだよ」

「でも、あの人形は冷たかったぜ」

「比喩だって！　要するに、連中は心の隙間を埋めたがってんだよ。パコパコやって一発抜いたら、それで終わりってわけじゃないんだ」

「わからないな。触覚に訴える分、リアルさが増してオナニーの質は飛躍的に向上するだろうけど、どれほどリアルでもしょせん人形は人形だし、オナニーはオナニーだよ。それを疑似セックスと呼ぶのは、単に言葉の解釈が違うだけで、性的なイメージをオカズとして利用してることに変わりはないと思うね」

「だったら、おまえはあれを使うか？　写真やビデオを見るのと同じような感覚で」

「考えなくもない」

大下は訝るような目で僕を見た。

「それ、マジでマジか？　おまえが人形とヤッたって知ったら、俺は引くね。間違いなくドン引きするよ」

「僕も犯罪者予備軍の仲間入りってわけか。ちなみに、おまえの考えだと、風俗に通ってる男はどういう位置づけになるんだ？　やっぱり予備軍か？」

この質問は意表を突いたらしく、口達者な大下が珍しく言葉を詰まらせた。

「それは……難しいな。ともかくさ、おまえがああいうのにちっとばかり興味を持ってるとしても、実際に使ったわけじゃないだろ？」

「まあな」

「実際に使ったのか、使ってみたいと思ってるだけなのか、その違いはデカいよ。俺が言いたいのは、つまり、そういうこった」

ここらが潮時と思ったのだろう。大下は、この一向に嚙み合わない議論を終わらせようとしていた。僕としても、いさ

さかうんざりしかけていたので、そろそろ行くかと言って立ち上がる。足下が少しふらついた。

勘定を済ませて店を出ると、我々は有楽町駅に向かった。肩を並べて歩きながら、大下は何も言わなかった。あるいは、僕が酔いに任せて口走ったことをどこまで真に受けるべきか、考えあぐねていたのかもしれない。駅に着いて改札を抜け、それぞれ反対方面行きの電車に乗るという時になっても無難な話題を思いつけなかった僕は、気まずい沈黙に耐えかねて再びルール違反をしてしまう。

「最近、美月さんとはうまくいってるのか？」

一瞬、大下は歩調を緩めたが、僕の方を見ようとしなかった。

「全然うまくいってねぇよ。この前なんか、必要事項を記入してご丁寧に判子まで押した離婚届をちらつかされたんだぜ。そもそも、本当にうまくいってる夫婦って、どっかに実在するんのか？」

吐き捨てるように言って苦笑すると、大下は横浜方面のホームに通じる階段を千鳥足で上がっていった。

そもそも、僕は大下と違って子供なんか欲しくない。自分が子供の頃は、いずれ大人になれば自然に欲しくなるのだろうと思っていたのだが、三十代も半ばを過ぎた今に至るまで、そのような感情を抱いたことは一度もなかった。生まれ育った家庭環境にそれとわかる問題があったわけではないから、我ながら解せなかったし、身体的にも経済的にも大きな負担を強いられる不妊治療や非配偶者間の人工授精などにすがってまで子供を授かろうとしている人たちには後ろめたさを覚えるものの、いらないものはいらない。いなくてもいい、ではなく、欲しくないのだ。

「子孫を遺したいっつうのは、生物としての本能だろ？　本能には逆らえんよ」

早く子供が欲しいという話になるたびに、大下はそう主張した。なぜわざわざ好きこのんで苦労の種を抱え込もうとするのか、僕にはまるで理解できない。あまつさえ、それが自分に似ているなんて、考えるだにおぞましい。

そのくせ、性欲は人並みにあるのだ。いや、人並み以上かもしれない。そういう人間にとって、セックスはパートナーとの親密さを育みながら純粋に性的な快楽を追求する行為となり、妊娠という本来の目的は単なるリスクでしかなくなる。いわば、性病の一種みたいなものだ。ジョン・アーヴィングの小説に、故意に穴を開けられたコンドームで妊娠してしまうエピソードがあったが、僕にとっては下手なホラーよりずっと恐ろしい。かつて旧弊な政治家が不用意に使って顰蹙を買った〝産む機械〟という言葉には、おそらく世の大多数の人たちとは違った意味で格別の嫌悪感を抱いている。

問題は、今もこの先も子供を作る気はないと事前に釘を刺された行為を、女性は心から楽しめるのかということだった。むろん、女性が生殖のためにのみセックスをするなどとは思わない。しかしそれは、この関係が成熟した暁には相手の男が我が子の父親になるかもしれないという、将来における一つの可能性を担保するために手付けを打っているのではあるまいか。

小説や映画などのフィクションにはセックスを好む女性もしばしば登場するが、そういうのはどれもこれも男の幻想なんじゃないかという疑念が僕には拭いがたくある。女心の機微というものに疎くて、そのへんのところがよくわからないのだ。性欲の多寡に個人差はあっても、本質的には男が女性に欲情するように女性も男に欲情するのだろうか？　男女の性生活に関する新聞や雑誌などの記事を読んでみると、女性がセックスを楽しむことを奨励するようなものが目につく一方、セックスレスで構わないという女性や嫌悪感をこらえてしぶしぶ男の求めに応じているという女性も少なくない。感じているのは演技だという女性もいる。彼女たちにとって妊娠を目的としないセックスが男に対する奉仕でしかないとしたら、それは男が搾取をしているということになりはしないか。不謹慎かもしれないが、いっそセックスで子供ができる心配のない同性愛者だったら、常に相手と対等に向き合えるのではないか……まだ陰毛も生え揃わない頃から、そんな由ないことをつらつらと考え続けているうちに自意識の隘路へと迷い込んだ僕は、それで一丁前に愛の不毛を垣間見た気になっていた。

要するに、めんどくさい男なのだ、僕は。今時は〝中二病をこじらせた〟とかいうのだろう。

めんどくさい男なりの誠意として、自分のスタンスを隠したり、ごり押ししたりしてことに及ぶような真似は厳に慎んできた。相手が恋愛や結婚の先に出産を見据えているとわかったら、深入りする前に潔く身を引いた。女性を一方的に搾取するのではなく、いわばウィンウィンの関係を結ぶことに心を砕いていたのだ。

とはいえ、僕に女性を振り向かせるようなセックスアピールがあるわけではない。さりとて金や権力があるわけでもな